

機関番号：12603
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20580233
 研究課題名(和文) 日本農政論の歴史的個性に関する総合的研究
 研究課題名(英文) Historical Studies on Originality of Visions on Japanese Agricultural and Rural Problems in Prewar Times
 研究代表者
 野本 京子(NOMOTO KYOKO)
 東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
 研究者番号：90208281

研究成果の概要(和文)：研究会を重ねる中で問題意識の共有につとめ、メンバー各自が研究課題に即したテーマを設定した。現在、日本農業が直面している問題を踏まえた上で、おもに明治期から昭和戦前期に書かれた日本農業論・農政論について新たな視点で読み解き、それらが当時の農業・農村に何を求めたのか、また現代の問題に対して示唆する点があるとすれば何かについて考察した。その成果は2011年度中に、『日本農政論の歴史的個性』シリーズとして公開予定である。

研究成果の概要(英文)：We tried for sharing an awareness of issues while we repeated meetings for the study. Mainly, we researched the problems facing Japanese agriculture and rural society in investigating new perspectives on visions which was written in prewar times. And so we attempted to understand any points on contemporary issues and suggest. We are going to publish the result as “Historical Studies on Originality of Visions on Japanese Agricultural and Rural Problems in Prewar Times” series in fiscal year 2011.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：農学

科研費の分科・細目：農業経済学・農業経済学

キーワード：農業史、農政論

1. 研究開始当初の背景

①現在、日本の農業・農村が食料自給率の低下や農業従事者の高齢化、そして耕作放棄地の増加等の問題を抱え、農村活力の低下といった困難に直面している。地域農業そして個別農家の「担い手」をめぐる議論は、現代だけではなく、歴史的にも繰り返されてきた。

例えば、1914(大正 3)年の社会政策学会第 8 回大会におけるテーマは「小農保護問題」であり、そこでの報告をめぐる、厳しい応酬があったことはよく知られている。

②本研究の問題関心の根底には、戦前期、日本農業や農村についてどのようなビジョンが描かれてきたのか、それが当時の農業や農

村の現実とどのように切り結んでいたのか、という問いがある。そして現在の日本農業や農村の現実について、このような歴史的視点に立脚したうえで捉え直したいと考えた。とりわけ、急激な産業化の進行という同時代性のなかで、当時の村落と小農経営の密接な関係がどのように当時の所論や運動のなかで位置づけられ、どのような農業像(ビジョン)として提示されているかについて注意を払いつつ、研究に取り組むことにした。「個」(個別経営の自立)と「共同性」(村落社会)を二律背反的に捉えるのではなく、架橋する枠組を見いだしたいと考えた。

2. 研究の目的

①上記の課題に迫るために、明治末期から大正期(一部、昭和戦前期)における農政や農村経済に関する著作およびその主張に基づく実践活動を主要な検討対象とした。

②その際に、学問としての「農業経済学」が体系化(確立)される以前の研究(著作)には、洗練されていないにせよ、農業や農村が有している本質的なものに迫ろうという姿勢があるのではないかと考えた。そこには、現代の農業や農村、さらには産業化社会を考える上での手がかりとなり得る有効な視角やビジョンが内包されているのではないかと考えるに至った。

③そこで、従来の研究史では学問的には体系性に欠けるといった批判や、「農本主義」の系譜に位置づけられる議論を含めて再検討し、新たな論点や農業・農村像を提示することを共通の目的とすることにした。同時に日本農業を担う主体として何を想定しているかを検証するとともに、以下の論点に留意して検討した。

- a. 他の産業に対して、「農」の独自性をどのように認識しているか。
- b. 農業の置かれた自然条件とともに、土地所有や農業経営といった社会的条件について、どのように認識しどのようなビジョンを持っているか。
- c. 村落(地域)と個々の農家世帯との関わり—「家」と「村」社会—をどのように認識し、どのように位置づけているか。
- d. 農業経営観や農業組織・農業集団の在り方

といった諸点についての検討を通じ、日本農業の独自性や個性について考察することを目的とした。

3. 研究の方法

研究目的としてあげた上記の視点を共有したうえで、代表者と分担者の5名は各自がもっとも関心のある研究対象を決め、京都ないし東京で研究会を重ねつつ、共同研究を進めていった。その際に、研究者の著作だけで

はなく、当時、産業組合運動を牽引していった千石興太郎や協同組合運動や農民運動等の多様な運動にかかわった賀川豊彦などの所論も対象とすることを決めた。また柳田國男の農政論についても歴史的に再検討することにした。

① 野本京子は、1920年代という辞退の転換期に登場した諸運動のリーダーや村落レベルでの担い手に焦点をあて、彼らの考える農業・農村像、当時の何を問題と考え、どのようなビジョンを打ち出していたかを検討した。具体的には山崎延吉、賀川豊彦、千石興太郎、那須皓等の所論を取りあげるとともに、当時の農民運動や産業組合運動そして全村学校運動の目指したものも検証した。各論者の著書だけではなく、『土地と自由』、『農政研究』、『清明心』といった当時刊行されていた雑誌の関連記事の分析を行なった。

② 野田公夫は、日本農業の個性を、類型論的視点を媒介にして世界とリンクさせることによって、日本農業を現代世界農業のなかの諸類型のなかに位置づけることを課題とした。農業技術論(中耕除草農業)、土地所有論(重層的・社会的土地所有)、村落(資源管理主体)という三側面の相互関連において日本農業の個性を具体的に明らかにするための検証を行なった。

③ 坂根嘉弘は、明治後期における農業をめぐる問題状況の確認作業から開始し、日本農政学とはどのような内容をもっていたのか、それが当時の社会経済状況の中でいかなる意義をもっていたのかを検討し、従来否定されがちであった日本伝統社会(「家」制度、「村」社会、農本主義など)の日本経済発展にもった役割を見直すという課題を設定した。具体的には「小農保護問題」の登場に注目し、日本の産業社会における農業の位置をめぐる議論(対立構造)を検討するなかで、輸入学的性格をもつ日本農政学が、日本の伝統社会をどの程度明確に把握できたかを検証した。

④ 牛島史彦は農商務省の高等文官として産業組合制度の普及や広報に従事した柳田國男の著作を綿密に読み込みも検証することを通じて、その主張の中に現代の農業および農村問題を的確に把握するための方途を見いだすことを課題とした。農業・農村問題に迫ることは、産業としての農業振興にとどまらず、農業の「多面的機能」への現実的な検証と活用策を考えることであり、柳田がその農政論や学問論(郷土論)で訴え続けたものも、この点と関わっていたという観点から検証した。

⑤ 足立泰紀は、「社会科学としての農業経済

学」を代表する東畑精一の学問の形成過程に着目し、昭和戦前期の東畑の論稿を可能な限り取りあげた。その際に東畑が柳田國男の農政論の系譜を継承しているという視点から、東畑が柳田から何を学びながら、独自の農業経済論、産業組合論を構想、発展させていったのか、また東畑と柳田の農政論の異同について解明するなかで、日本農政学の個性の一端を照射することにした。

4. 研究成果

研究会での各自の報告を通じて、当初の問題設定は具体化し、より明確化していくことになった。その研究成果は、2011年度中に農山漁村文化協会から「日本農政論の歴史的個性」と題するシリーズとして刊行予定である。以下は、シリーズに入る予定の代表者と分担者の本のタイトル(仮題)とその概要である。

① 野本京子：地域農業の主体形成—転形期の家族小農経営と村落社会

第1章では「農地」(とくに土地所有)に関する理念と提唱を主題に、初期の日本農民組合の運動方針中にある「土地の社会化」論や賀川豊彦や那須皓の所論について検討した。また農地の管理主体として町村や産業組合に期待した山崎延吉と千石興太郎のビジョンについて明らかにした。第2章では小農経営「合理化」を提唱する賀川豊彦、山崎延吉、千石興太郎の議論を取りあげ、その共通点や差異について論じた。第3章では、「生活」という視点(生活改善)が浮上してきたことに着目し、「農村文化」の提唱の意味するところを検討した。「生活価値の意識」を論じた山崎延吉、「安固快適生活主義」を提唱した千石興太郎のほか、農村文化協会の活動の軌跡を明らかにした。第4章では地域での「主体」形成の試みを、愛知県碧海郡野田村の青年たちの組織(清明社)の活動や農村文化講習会そして全村学校、農道講習会という各地での実践を通じて検証した。

これらの検討を通じて、戦前の「生活改善」や農業経営合理化を模索するさまざまな動きが戦後につながっていったことや、村落社会(地域)を基盤にした活動のもった意義、そこで営農する人々の「主体」形成に向けての実践の一端を明らかにした。

② 野田公夫：日本農業の展開論理と農政—歴史を超えて未来へ—

本書はシリーズを通して、もっとも現代的課題をつよく意識したものであり、総論的な位置を有することになる。第1章では世界のなかの日本農業を類型論という視座から論じ、第2章では農民と村が動いた時代として大正期に焦点をあてて、農業・農村の主体

性について小作争議や農家小組合と小農という観点から検討する。第3章では、日本の農地改革(自作農制)を取りあげ、戦後農業変革の世界史的個性を明らかにすることを仮題としている。第4章では近代日本の農地問題を踏まえたうえで、「現代的土地所有」について模索し、農業と地域について再定義することを通じて、現代農業問題を見直すために、「社会の復権」という論点を提示する。

③ 坂根嘉弘：日本伝統社会と経済発展—日本農政学の光芒—

第1章では「日本伝統社会の形成と地租改正」について取りあげ、日本的「家」制度についてグローバルな視点で位置づける。第2章の農業問題の発生と日本農政学では、日本農政学の自己形成を、日本産業社会の構図とそれをめぐる対立構造のなかで検証し、日本農政学の特徴を明らかにした。鉱害問題の発生とそれに対する農政学の立場からの関与についても検証した。第3章では小作制度の発達と小作争議の発生について、日本伝統社会(「家」制度、「村」社会、農本主義など)の担った役割・機能といった観点から再検討した。第4章も同様の視点から、農会、産業組合、納税組合といった諸団体の展開について論じた。これらを通じて、これまで否定的・消極的に捉えられていた日本伝統社会の在り方が、日本経済の発展に大きく関わっていたことを明らかにした。

④ 牛島史彦：国民の農業—柳田國男農政論と国民主体の形成

牛島史彦は「生活領域の持続的活性化」という視点から、柳田國男の所論について検討を加えた。第1章では、農業経営と農業政策の観点から、柳田の『最新産業組合通解』(経営持続の条件)、『中農要請策』(小農経営の自立)を読み解いている。第2章では農業経営と社会環境という視点から、『時代ト農政』(市場原理と農業政策)および『農業政策』(地方市場と農業政策)を俎上にあげる。第3章では格差社会と国民主体という観点から、柳田の農政学から民俗学へという軌跡を捉え、『青年と学問』(学問と国民の自立)を検討している。第4章では商業主義と農村自立について、『都市と農村』を手かがり論じている。柳田國男の農政論・学問論を通じて、農産物と農業の有する多面的機能を享受する消費者の側が適正な農業観・農村観をもち、生産消費関係の適正化について考察している。

⑤ 日本農政学における内発的発展論—柳田・東畑農業理論の眼目を探る—

足立泰紀は、戦後の基本法農政を先取りする「自立経営」の育成策等、柳田國男の農政

論のもつビジョンの先駆性に着目し、日本農政論史に正當に位置づけたいとする。日本における農政論・農業経済論の生成、展開過程からみると、柳田の農政論は「最良の知性」によって継承されていったとする。それは昭和戦前期における「社会科学」的な農業経済論の誕生、とりわけ東畑精一の理論構築に柳田の農政論・産業組合論は大きな影響を与えていることを明らかにすることが主要なモチーフである。柳田の農政論がきわめて経済学的な思考によって構築されているとし、第1章では東畑の柳田受容の背景について論じ、第2章では柳田と東畑の基本的なフレームワークが国民経済論的であると同時に、経済主体として農民経営を捉えていることを明らかにし、両者の議論が「内発的な発展」を構想しているとする。第3章では柳田と東畑の農業保護政策に対する基本的立場がどのようなものであるかを検証する。第4章では戦時期の統制経済論とは異なる立場に居続けた東畑の論稿を検討し、戦後農政との関わりを展望している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 野田公夫、日本農地改革の歴史的特質—第二次大戦後土地改革の比較史をふまえて—、シンポジウム・戦争と社会変容、査読無、2010、pp.75-83
- ② 野田公夫、「ひとびとを主人公にした現代史」の試みをめぐって、査読無、第574号、2010、pp.86-100
- ③ 野田公夫、構造政策より日本的土地所有、現代農業、査読無、2009年2月増刊号、pp.194-201
- ④ 野本京子、戦前から戦後における『婦人之友』友の会の生活改善運動—農村友の会の活動を中心に—、東京外国語大学論集、査読無、第77号、2008、pp.187-207

[学会発表] (計2件)

- ① 野本京子、農村における生活改善運動—恐慌期から戦時下を中心に、国立民族学博物館国際研究フォーラム、2010年10月9日、国立民族学博物館
- ② 野本京子、「農本主義の戦前・戦後」セッション、農業経済学会、2009年3月28日、京都大学

[図書] (計4件)

- ① 坂根嘉弘、他、吉川弘文館、日本農業史、2010、417
- ② 坂根嘉弘、他、清文堂、日本とアジアの農業集落 組織と機能、2009、297

- ③ 野田公夫、他、秦荘町史編さん委員会、秦荘の歴史、2009、500
- ④ 野田公夫、坂根嘉弘、他、日本経済評論社、世界システムと東アジア—小経営、国内植民地、「植民地近代」一、2008、268

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野本 京子(NOMOTO KYOKO)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：90208281

(2) 研究分担者

野田 公夫(NODA KIMIO)

京都大学・大学院(連合)農学研究科(研究院)・教授

研究者番号：30156202

坂根 嘉弘(SAKANE YOSHIHIRO)

広島大学・大学院社会(科)学研究院・教授

研究者番号：00183046

足立 泰紀(ADACHI YASUNORI)

近畿医療福祉大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：30269923

牛島 史彦(USHIJIMA FUMIHIKO)

九州女子大学・人間科学部・教授

研究者番号：10258345